

探訪 北の風景 81

道の駅に復活したススキノの置屋 空知管内奈井江町・道の駅ハウスサルビ

萩本和之

て延べ575平方メートルで、日本一長い国道12号線の直線道路（29・2キロメートル）のほぼ中間地点にある。奈井江町の友好都市・ハウスサルビ（フィンランド）にちなみ名付けられ、中には福祉法人が経営する喫茶「みみずく」や地元野菜や特産品などを販売する直売所などが入るほか、周りには多目的広場や植栽された樹木も整備されており、年間延べ20万人弱が利用している。

鴨々堂は元来、札幌市内を流れる鴨々川沿いの中央区南7条西2丁目にあり、木造2階建て約100平方メートル。民衆史研究家の石川圭子さんが2013年にイベント・芸術交流拠点として借り、ススキノの歴史と文化を学ぶ「鴨々川ノスタルジア」などを展開していた。

しかし、周りの開発に伴い建物の基盤が傾き始めたので、2019年10月から手作業で丁寧に解体した。その際、北海道開発局札幌開発建設部や砂子組（本社奈井江・砂子邦弘社長）などの若手ら建築関係者が手伝いをし、その縁から「石川さんの建物への熱い想い」に添えて古材活用策として奈井江町内への移築案が浮上した。

設計、施工を担当し旧奈井江小を卒業している



砂子社長は「鴨々堂はくぎを使っていない貴重な歴史遺産で、それを思い出の地に再現できてよかった」と喜んでいるという。

移築された屋根付きの待合処は、4畳ぐらいの和室と玄関、縁側で計12平方メートル。雪見障子のほか、家具も置かれている。石川さんは「永続社会の象徴でもある古材のもつ歴史性、再生力を感じてほしい」と話し、奈井江町産業観光課の都築岳司主幹は「建築をきっかけに郷土史研究会が石川さんの助言を受けながら活動を活性化させる計画もある」と期待を寄せている。

道の駅の直売所で販売されている手打ちそばは、国道沿いにある有名な「そば処からまつ園」（佐藤正光店主）のもの。空知管内浦臼産の無農薬ボタン種を使った二八そばで、天ぷらなどに使う野菜は主に奈井江産。からまつ園は「ミシユラン北

「古民家が建物の内に！どうして？」ここは国道12号線沿いの道の駅「ハウスサルビ奈井江」の2階。古民家は2019年までは札幌・ススキノで「ギヤラリー鴨々堂」だった建物の古材を使い建てた「待合処 鴨々堂」で、もともとは100年前の大正末期ごろ建設され、芸者の置屋としても活用された歴史をもっている。

道の駅は1995年、旧奈井江小学校跡地に建設された北欧ログハウス風外観を持つ木造2階建





「ハウスヤルピ奈井江」2階に復活した「待合処 鴨々堂」。100年の歴史を体感でき、今後は国道沿線市町村の活動拠点としても期待される

札幌・ススキノにあつて100年の歴史を誇つた「ギャラリー鴨々堂」と民衆史研究家、石川圭子さん(写真中央)。各種イベントなどの拠点となつていた。2019年9月30日撮影



北欧ログハウス風の「ハウスヤルピ奈井江」。入口前には北門信金が寄贈した「若き立像85」|| 笹戸千津子作が設置されている。中には喫茶「みみずく」や、「からまつ園」のそばを販売する直販所もある

「海道」の「ビブグルマン」(調査員おすすめめの店)に選ばれたこともあり、従業員の中には障害者もいて「味も雰囲気も優しい」と評判だ。
佐藤さんは先代の道夫さんの後を継ぎ、会員約130人の「北海道そば研究会」会長でもある。「コロナ禍で大変な面もあるが、先代の魂と伝統技をしっかりと受け継ぎ、そばの魅力を一人でも多くの方に伝えていきたい」と抱負を語っている。

△はぎもと かずゆき・元札幌国際大学教授▽